ガラスのハエとりから57年

――初体験としての還暦――

糸乗　貞喜

（よかネットNO.25　1997.1）

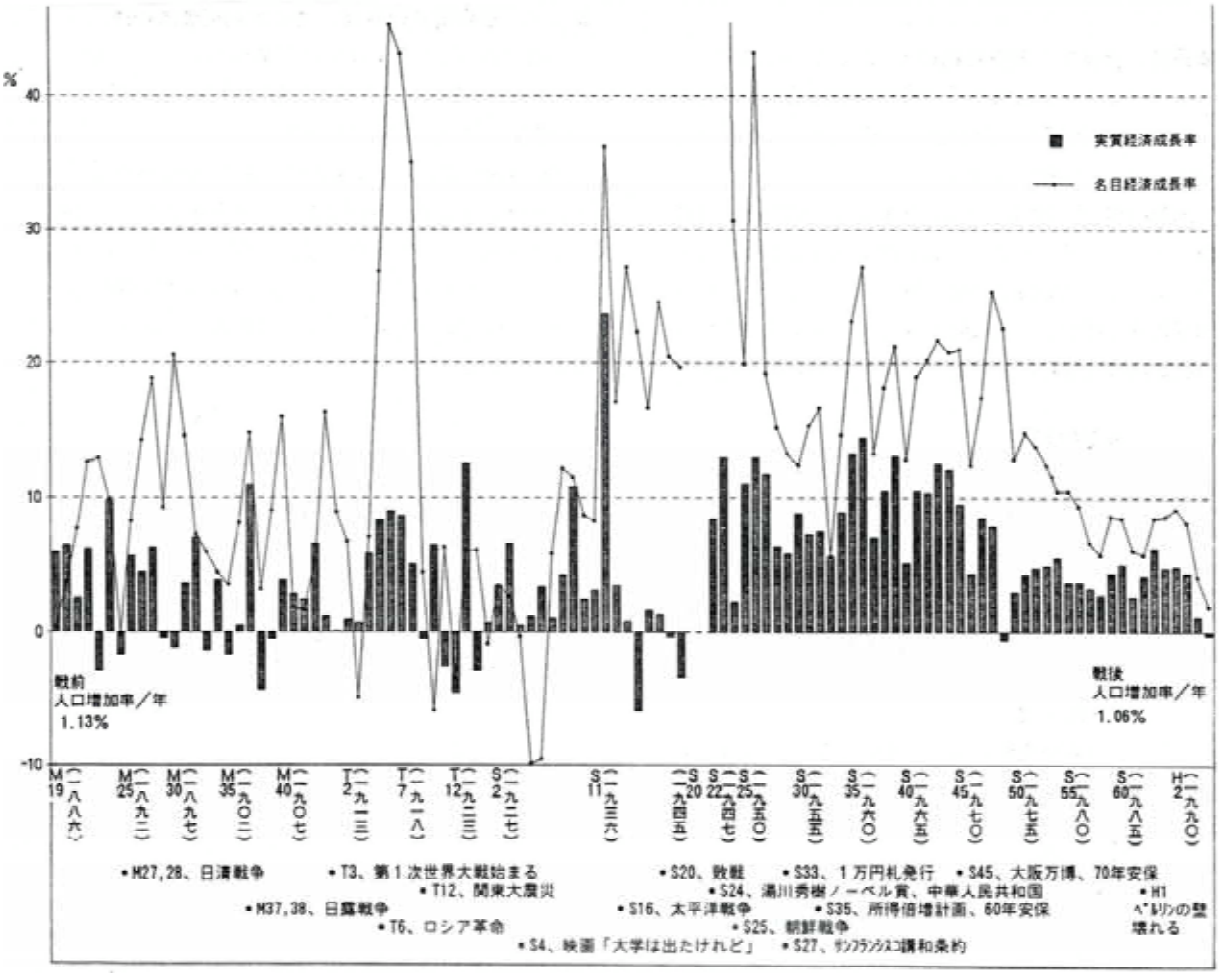
■日本国民の還暦120年と私の60年

還暦というものを経験した。別にその日に地震が起こるわけでも、風が吹くわけでもない。生きていればその日に60歳になるということは、60年前からわかっていたことであるが、「還暦って何なのかなぁ」ということが、２～３年前から気にかかっていた。

1936年は丙子（ひのえね）で、12歳上に甲子（きのえね）の人たちがいる。12歳若い層は1948年生まれで、その次は1960年が子年になっている。このようなことを辿りながら、私の60年のうち、はじめのひとまわりや２巡目とそれ以後の世界が全く違ってしまっていることに気がついた。もっと単純に言うと、第１巡目の1936年から1948年までは戦争によるひどい時代で、それ以降はずっと右肩上がりの「毎年毎年、前の年より良くなる」時代だったことである。

それでは、もうひとつ前の還暦120年前（1876年）から60年前（1936年）まではどうだったのだろう、ということが２～３年前からの関心の的となり、調べてみなけりゃならんと思っていた。

実質経済成長率がどうだったのか、これが最も簡



図表1　日本人の還暦120年史　日本の“国民国家”の成立を、欧米諸国との不平等「条約改正」の動きと、国内における国会開設運動とみるならば、1995～2000年ぐらいが還暦２代（120年）ということになる。そのことを意識して、上のような図をつくった。戦前の不安定と戦後の安定大成長がよく現れている。

単なわかりやすい比較だと思うので、それをさがしてみた。もちろん明治初年に現在のような統計があるわけがない。しかし幸いなことで、私どものような素人にもわかるように「日本長期統計総覧」に、いろいろな人の推計した統計値をもとにすりあわせた数値がのせられている。以下の文章と図は、それと日本統計年鑑の平成８年版をくっつけて書いたものである。

①統計に示されているのは、1886年（明治19年）から1944年（昭和19年）までの59年間と、1947年（昭和22年）から1993年（平成５年）の47年間である。（1944～1947年の間は戦争末期と戦後の混乱期であって、統計は整っていない）

②戦前の59年の間にマイナス成長の年が14回ある。なお、この間に日本の人口は、38,313千人から74,433千人へ1.94倍に増えている。人口は年々平均的に増えたわけではないが、この人口平均増加率（1.13%）より実質成長率の方が低い年を加えると24回になる。つまり、59年のうち24年は、「去年よりは貧しくなる」という歳月を、日本人全体が持っていたことになる。

③統計を見ての私の感想だが、戦前のデータは極端に突出しているところがある。例えば、昭和12年は、実質成長率が23.7%（名目が31.6%）となっているが、いくらなんでも１年に23%豊かになるというのは大きい。戦前部分図で見ていただいたらわかるように極端な突出がある。この突出は少し割り引いた方がよいのではないかというのが私の主観である。

④戦前は、人々の幸せというものに占める経済的な条件が、今よりもはるかに大きかったと考えられる。不況となると「娘を売ります」という時代だった。そういう意味で、好・不況を追ってみると、戦争の前に景気が良くなって、終わると不況になるということを繰り返しているように見える。それがはっきりしているのは日清戦争と日露戦争である。

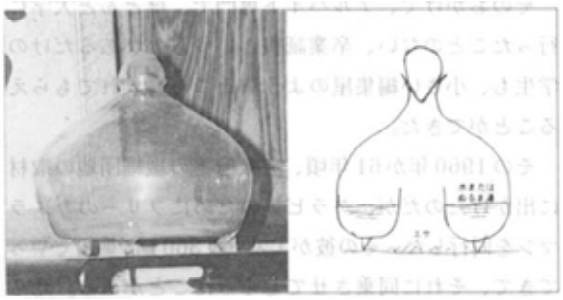
⑤それ以後は、第１次世界大戦期の好景気はあるものの、1920年（大正９年）以降は不況に入っていく。その中で1931年の柳条湖事件（日本軍が鉄道を爆破して、それを中国軍によるものと偽って中国軍に攻撃をかけ、満州事変という戦争に入っていった）、1937年の蘆溝橋事件をきっかけとする日中戦争、1941年の真珠湾攻撃に始まる太平洋戦争へと突入し、ついに統計にさえ表せない悲惨な結果を招いた。私の生まれた丙子の年は悲惨の出発となったあたりの1936年（昭和11年）である。考えてみると、1931年から45年まで15年間にわたって、日本人は戦争の中にいたのである。

■破局の前の豊かさと「ガラスのハエとり」

私の幼児体験の第１は「ガラスのハエとり」ということになっているので、それに触れなければならない。正直のところ３～４歳ぐらいの頃の話であり、本当に記憶しているのか、後に何度も聞かされているうちに体験したように思いこんでしまったのかはよくわからない。とにかく、玄関に入ったタタキの土間の、上がり框の上の障子の敷居のところで、事件が起こったように思いこんでいる。

「ガラスのハエとり」は戦前にはどこの家にもある道具だった。図のようなガラス器の中央部分に甘いものか魚の頭などを置いてハエをおびき寄せ、上へ飛び上がったが最後、逃げられないという、ハエの習慣を利用した合理的な器具であった。問題は割れやすいと言うことである。

私の家は但馬の国の中でも山奥の方で、最寄りの鉄道駅からでも13㎞あった。バスも１日に数回来るだけで、小学３～４年生までに海を見たと言ったら、かなり自慢できた。もちろん駅のある町へ行くことなど、滅多にあることではなかった。なぜか親父はよくバスで町へ出かけており、帰りには土産（駄菓子）を買って来てくれることになっていた。上の兄姉とは５歳離れており当時は一番下だったので、最



ハエはえさに近づき、飛び上がっても出ることができない。いずれも水に近づきおぼれる。

もわがままに育っていたのだと思う。

問題は、親父が割るまいと用心しいしい持って帰った「ハエとり」の包みを、上がり框に腰掛けて敷居の上に置いたときに起こった。私はてっきり「これは自分のもらう菓子だ」と思って、さっと持ち上げたところあまりに軽かったので、「これは菓子ではない」と思ってポイと放り出してしまった。その瞬間に「ガラスのハエとり」は一巻の終わりとなってしまった。

ぐたぐたとつまらないことを書いたが、言いたいことは、1939年頃までに、まだまだ経済的にはましな状態が続いていたということである。

当時わが家には「ハエとり」はひとつはあったはずだが、親父は「安かったから」というぐらいのつもりで買ってきたのだと思う。また、逆に言うと、「ハエとり」というようなものを生産するということに示されるように、ガチガチの戦時経済ではなかったように思う。

しかし、学校に併設された幼稚園へいく頃（1942年、昭和17年）には大根メシの時代に入っていたかもしれない。たしか幼稚園というものも、われわれの年代で廃止になり、「国民学校１年生」になったときには幼稚園はなかったように記憶する。

■子供の心に刻まれた戦争体験

なぜか理由はわからないが、子供に対する大人扱いの尺度は２歳きざみだったように思う。１、２年生はほとんど子供扱いで、冬の、息もできなくて立っているのがやっとといった猛吹雪の中の登校でも、上級生に保護されていた。しかし３年生になると、肥たごと棒を持って学校に行って、学校の便所から数百メートルも離れたさつまいも畠まで、２人１組で運ぶ義務が発生した。もちろん上級生もである。小学３、４年生というと、２人で肥たごを担いでも、背の低い子は下がつかえたままで上がらない。肥たごの紐を棒に巻いて下がつかえないようにすると、目の高さぐらいまで黄金水が来て、はねて顔にかかったりした。さらに５、６年生になると、鋸と斧を家から持っていって炭焼の木材の下拵えをしていた。

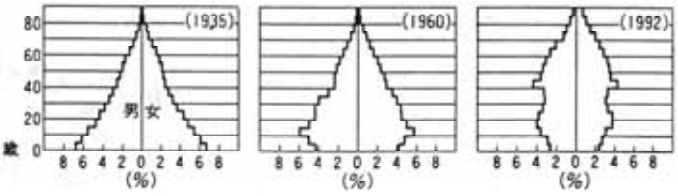
戦争というものは、結局効率よく相手を殺すことにつきるわけで、そういう体制下では子供まで、極めて気味の悪いような「苛めの常態化」が起こる。今でも覚えているのが、何かの拍子に高等科（小学校６年卒業後２年間就学した）の生徒が、６年生ぐらいだったかの丸刈りの頭を鋸の背で打った。見る見る縦長の血を含んだ瘤が盛り上がった。「瘤というのは長いやつもあるのか」というような気がしたことを覚えている。

また、苛めの頂点に教師がいることも多かった。国民学校の２、３年生の頃は女学校を出たばかりの女の先生が担任だった。この先生は体操や運動のできる生徒を贔屓とし、少し機転がきかなくて、学業成績の良くない生徒がへまをやると、お気に入りの子に代理でビンタを張らせたりしていた。極めつけは、教室の机の間に座って、気に入らない子に走ってこさせて、不意に足を出して転倒させるというやり方である。それを避けて転倒しないようにしようとすると、もっと大きい報復が来た。これらのことはすべて「天皇陛下のため」という言葉を前提にして行われていたのである。この時の生徒は７～８歳（２、３年生）であり、先生は女学校卒業直後の16、７歳だった。

この教師が、敗戦ともなると軍国主義から民主主義に転換し、教科書に墨をぬるのを指示した。もちろんよい先生の方が多かったように思う。

圧倒的多数の熱狂的支持のもとに行われることというのは、不気味なものが多かった。最も不気味な戦争体験は、敗戦の年か翌年ぐらいだったと思う。事情通のクラスメートが、何やら朝から「今日は自習になるぞ」と囁いて廻っていた。昼前になると「先生全部バタバタ（三輪オートバイ）で町に出た

1958年に富士重工から売り出されたスバル360



図表4　日本の人口構成の推移

60年前の年齢構成と現在のものであるが、「えらく変わってしまっているな」という感じがする。おそらく60年前に今の状況は予想できなかっただろうが、次の60年後はどうなっているのかな。

ぞ」となり、「映画を見に行ったらしい」ということになった。教師は全く昼前からいなくなり、小使いさんだけが残っていた。後にわかったことは、先生全員が13㎞先の町まで映画を見にいってしまったということだったが、先生は何一言も言わず、頬被りを決め込んでしまった。この時「正体見たぞ！」といった気分になったことを覚えている。昨日まで子供に対して苛酷な体罰までして、「国のため」戦ってきた先生方が、簡単に敵前逃亡（子供を放って映画を見に行く）をしてしまうという様子を見て、状況に迎合する人間の頼りなさがよくわかった。

高校時代か大学時代かに、ヤセンスキーというポーランド人の「無関心な人々の共謀」という本が出た。この新書版上下２冊の本を見ながら、戦争の頃勇気をもって友人を庇うことができなかった自分を思い出していた。私も陰惨な共犯者なのである。

「多数意見は信用しにくいぞ」という癖が身に付いたのも、このときの戦争体験がもとになっている。

■戦後は一直線の経済成長だった

あまりにも破壊されつくしたからでもあるが、戦後の２年目頃から朝鮮戦争が休戦になる1953年頃までは、ほとんど２ケタ成長が続いている。また1960年以降も「所得倍増」以上の勢いで２ケタ成長が続いた。

戦前の59年間のうち、人口１人当たりということで比較すると、ほぼ半分に近い24年がマイナス成長であったということは先に触れた。ところが戦後の47年間（1946年から1993年まで）では、オイルショック時の1974年と、バブル期の1993年の２回しかない。この47年間に人口は75,750千人から124,764千人に増えているので、人口の伸び率は1.06%になっている。それより低い実質成長は２回しかなかった。

そのおかげで、アルバイト専門で、ほとんど大学に行ったことのない、卒業証書というものがあるだけの学生も、小さい編集屋のようなところに入れてもらえることができた。

その1960年か61年頃、大阪府下の繊維団地の取材に出かけたのだが、グラビアのためにフリーのカメラマンを同行した。その彼が「スバル360」に乗ってやってきて、それに同乗させてもらったことがある。えらく窮屈であるが、一応乗れて、ブーブーうなりながらでもよく動いた。そのカメラマンは、“自家用車を持っているということなんだな”と思い、とろとろと走るスバル360の中で、前方に明るさが見えるように感じた。このスバル360が富士重工業から売り出されたのは昭和33年（1958年）のことである。

■次の60年はどうなるのだろうか

あおりにあおった株価や不動産が暴落して、右肩上がりを前提にして約束していたことが守れなくなったとき「バブルがはじけてしまってはどうにも……」という言い訳が多く罷り通りだした。当時私もリゾート計画などに携わっていて、「地方にはリゾートのサービスをやる労働力がないから、大規模リゾート計画は無理だ」といっても、「日本中がリゾートと言っているし、政府も奨励している。もっと大規模投資型の計画にせよ」といっていたのが、株が下がり始めた途端に「バブルがはじけたんだから仕方ない」と言って、すべての前言を取り消してしまった。

もともと地方の地域開発やリゾート開発に関心があったのではなく、都市側の中央の人間が、地方の土地を開発して、都市側の人との間で土地ころがしをするのが目的であったので、地元の従業員などはいらなかったのかもしれない。バブルがはじけたのが問題ではなく、バブルをあおったことが悪かった

のである。

この頃、奇妙に戦後の大人たちの「軍部が勝手に暴走して……」という話を思い出した。先にふれたように、戦後の学校の先生方の動きもひどかった。バブル後の動きと戦争のときの大人や先生たちの動きがよく似ていた。つまり、「大勢に追随する人間というのは信用できない」ということを改めて思い起こした。

では次の60年はどうなるのだろう。

簡単に言うと３つのシナリオがある。第１のシナリオは戦前のように毎年上がったり下がったりして安定などはおぼつかなくなることである。第２はこの50年間のように年々豊かになっていくこと。そして第３が、働く人も減っていくので下がりつづけていくというシナリオである。

もう一つあるかも知れない。それは江戸時代モデルで、人口は増えず、経済も成長しないが、文化的な面では大幅に充実するという道である。案外これが最もいいシナリオかもしれない。「モノはそれほど豊かではなくても楽しく暮らす」というのが高齢化日本に合っているのかもしれない。

■では個々人はどんな対応があるのか

阪神淡路大震災のとき、沈着冷静な被災地の人々を見て、「さすが日本人の武士道は庶民の間に受け継がれているのだな」と思った。太平洋戦争の末期の戦後、さらにバブルに踊った人や大蔵省の官僚などの動きを見て失望していたのだが、少なくとも一般の大衆には武士道が受け継がれているのを見て頼もしくなった。

最近、司馬遼太郎の文章を読んでいたら、飛行機事故のエピソードが紹介されていた。香港を飛び立って20分ほどたった頃、機体から煙が出だして、スチュワーデスがもう危ないと言い出した。乗客はほとんど外国人で、その中に日本人も６～７人いた。他の国の人々は遺書を書くとか、遺品の整理をするなど騒いでいるのに日本人だけ騒がなかった。これを司馬は、日本人の仏教文化で説明している。

責任感とか潔さ、あるいは思いやりなどは鎌倉以来の武士道（特に江戸期に確立したといわれている）かと考えていたが、もうひとつ仏教文化があったのかもしれない。しかし「油断はできないぞ」という声がどこからか聞こえてくる。太平洋戦争末期の指導者達の動きや戦後の食糧難の中の、われ勝ちに人をおしのけた混乱を思い出すと、食料不足の時は大問題かもしれない。

よくこういう話を聞く。

原爆や水爆が落ちたら、あるいは原子力発電所が故障して爆発でもしたら「どこにおっても同じなんだから、考えても仕方ないんじゃないですか」という話である。こういうことを言う人は、何が起こっても泰然自若として冷静沈着に腹をすかしながら、あきらめて自然に死んでいく人である。

しかし私はどうなのだろう。

自分の身内や知人を先にするような、あるいは自分を第１にするような嫌な性格が丸出しになるかもしれない。

ではどうすればいいのか。

結局程度の低い人間は、今からエゴを前提にして、できれば少しでも食料の自給度を高めて、日頃から友人や近隣に気配りをし、親切にし「ひょっとしたら、その何分の１かの人でも覚えていて、頼りない奴だから少しは助けてやろうかと思ってくれないか」という期待が増える生き方をする。正にこれこそエゴの権化だと思う。「エゴ教」といってもいい。

これは個族化社会のネットワーク型生き方でもある。